

## 早期に診断・治療が可能であった 特発性食道破裂の1例

みず たに かず のり まつ ぼら たけし ひら はら のり ゆき  
水 谷 和 典<sup>1)</sup> 松 原 毅<sup>2)</sup> 平 原 典 幸<sup>2)</sup>  
たに うら たか ひと た じま よし つぐ  
谷 浦 隆 仁<sup>2)</sup> 田 島 義 証<sup>2)</sup>

キーワード：特発性食道破裂，大網被覆術

### 要 旨

特発性食道破裂は比較的まれな疾患であるが，特異的な症状に乏しく，初期治療の遅れは致命的となる。特発性食道破裂の確定診断には食道造影が最も信頼性が高いが，造影CTでも診断は可能で，より迅速に多くの情報を得ることができる。症例は60代男性で，飲酒後の嘔吐に引き続いて左肩痛と左側腹部痛を認めた。発症3時間半後の造影CTで縦隔気腫と食道周囲軟部組織の肥厚を認め，特発性食道破裂と診断した。発症から5時間で手術に臨み，破裂部を一期的に縫合閉鎖して大網を被覆した。術後に膿胸を認めたが胸腔内に留置したドレナージチューブにより保存的に加療しえた。特発性食道破裂は症例数が少なく，エビデンスレベルの高い治療法はないが，所見によっては保存的治療も選択肢のひとつとなる。本症例における術式の妥当性と保存的治療の可能性に関して，文献的考察を加え報告する。

### はじめに

特発性食道破裂は，急激な食道内圧の上昇により食道壁の全層に損傷をきたす疾患である。比較的稀な疾患であり，診断に難渋することも多いが，治療が遅れると縦隔炎や膿胸，敗血症などの重篤な合併症を起こしうる致命的な疾患でもある。近

年，ドレナージ法の工夫や内視鏡的治療の進歩により，保存的治療が選択される機会が増えつつあるが，その適応に関しては慎重に検討すべきである。今回，早期に診断し，胸腹連続切開下に一期的な縫合閉鎖と大網被覆を行うことで良好な結果を得た症例を経験したので報告する。

### 症 例

症例：60代男性

主訴：左肩痛および左側腹部痛

現病歴：送別会でビールを1本飲んだ後，嘔気が

Kazunori MIZUTANI et al.

1) 島根大学医学部附属病院卒後臨床研修センター

2) 同 消化器総合外科

連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1

島根大学医学部附属病院卒後臨床研修センター